

TIJ 日本語教育研究会通信

No.46 2011.9.20 発行

発行: TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩1-17-10
Tel:03(5607)4100 / Fax:03(5607)4102
E-mail tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



東日本大震災から半年たちました。被災地では、これから町をどのように復興させていくか、検討が始められているようですが、まだまだ厳しい状況が続いているようです。震災後、外国人の間に日本離れが起こり、多くの人が帰国しました。その後、戻ってきた人も多くいますが、外国人を日本に呼び戻すには、何らかの対策を立て、アクションを起こす必要があります。皆様のところでは、どんな状況でしょうか。

8月初旬に日本語学校教育研究大会があり、そこで震災後の日本語学校のあり方が大きなテーマとして掲げられました。本号にそのご報告を掲載いたします。

昨年の10月から今年の8月まで約一年、中国の大学生がTIJで勉強しました。その授業の一部を担当した講師より授業内容を報告させていただきます。また留学した大学生が修了時に書いた作文を掲載いたします。

また海外便りとしてシンガポールからの報告、獨協大学の大学生の教育実習レポートも掲載いたしました。

【本号の内容】

1. 日本語学校教育研究大会に参加して
2. 日本語学校教育研究大会ご報告
3. 日本留学した大学生の授業を担当してー文学史を担当して
4. 日本留学した大学生の授業を担当してー「日本文学」報告
5. 日本留学した大学生の修了作文
6. 海外便りーシンガポールからこんにちは
7. 教育実習レポート

日本語学校教育研究大会に参加して

広瀬万里子 (TIJ)

8月8日と9日に毎年恒例の日本語学校教育研究大会が開かれました。今年の大きいテーマとして取り上げられたことは「東日本大震災から見えてきたこと—私たちはこれでいいのか?」ということでした。今回の震災、特に福島第一原発の水素爆発により、日本に留学しようという学生が著しく減っています。留学生たちの母国では、津波の模様や水素爆発の模様が大きく報じられ、地理的状況がわからない人たちは日本全体が被害を受け、汚染されているかのように思っているようです。しかし、よく考えてみると、実はこの学生の減少傾向は震災前から始まっていたことで、一朝一夕では解決できない根の深い問題です。原因として考えられることは

1. 日本の経済力が落ち、国際的地位が下がっているため、日本の魅力がなくなっている。
2. 中国に関して言えば、国内の大学数が増え、国内で高等教育を受けられる人が増えたため、日本に留学する必要がなくなっている。
3. 中国の経済力が上がり、特に沿岸部の人たちは日本に来ることのメリットを感じなくなっている。
4. 欧米への留学が以前より容易になった。
5. 短期的な要因として、円高で経済的に大変になったこと。

などです。

国として「留学生 30 万人計画」を掲げていることもあり、文部科学省を中心に「奨学金制度の充実」などの政策を実施すると同時に、日本の安全性と日本留学のメリットを国際的にアピールする必要があります。

TIJ のような日本語学校は、大学と違って、対象がほとんど外国人であるという特殊性があり、問題はより深刻です。各学校が、ただ単に学生をどう募集するかということではなく、これを機に学校のあり方を考え直す必要があります。平常時においても、学校は、質の向上を目指すとともに自校の特徴を明確化することが必要であり、またそれを発信しなくてはなりません。それを肝に銘じながら、TIJ の教育理念と特徴を改めて挙げてみました。

★TIJ の教育理念

1. 母国と日本を結ぶ架け橋となる人材を育成することによって、両国の友好関係の発展に寄与する。
 2. 世界様々な国の人たちがともに暮らす共生の社会作りに貢献する。
 3. 学生一人一人が人生を切り開いていくのを支援する。
- 1、2は、設立当初からの理念です。3は、学生層が以前と変わってきてから加わった理念で、特に文書に書くなどして公開しているものではありません。これを機にもう一度明確化し、ホームページやパンフレットに明示していきたいと思えます。

★TIJ の特徴

1. 一人一人の学生に対する親身の指導
2. 会話力、運用力を高める教授法
3. 教材作成もする熟練した教師陣による質の高い授業
4. 高い進学率

以上がT I Jの特徴であると私自身は考えてきましたが、今それが実行、実現されているか、また新たな特色として打ち出せるものがあるか、常に自己点検を続けていかなければなりません。自己点検、自己評価をする方法を何か考え、実行していきたいと思います。

★発信の方法

今までの発信方法は、ホームページとパンフレット、新聞への広告掲載でしたが、必ずしもうまく発信できていたとは言えません。今後は次の方法で発信力を少しでも高めたいと思います。

1. ホームページの充実 学習者の声のページを増やすなど
2. 学校新聞を1年に3回ぐらい発行する。

配布先 在校生、卒業生、提携機関、研究会会員、関係者
さらに、どんな発信方法があるか、引き続き検討したいと考えています。

日本語学校教育研究大会ご報告

市川さゆり (TIJ)

今年もとても暑い日に日振協の研究大会が行われました。今年は震災があつて、その際、それぞれの人生の意味を問われましたが、研究大会でもそれぞれの日本語学校の意味を問い直すというのがテーマでした。それぞれの日本語学校の教育理念は何なのか、自分自身の教育理念は何なのか、改めて考えるべき時だというものでした。自分が外国人なら今の日本に留学するのか、もししないなら、それでも何故外国人を日本に招こうとするのか、その意味はどこにあるのか、今日本語学校で外国人に日本語を教える意味は何か、その答えを各学校がきちんと探さなければならない、もはやどうやって学生を集めるのかという技術論だけを話す時ではない、という重いテーマでした。私自身も日本語学校で日本語を教える意味を改めて考えねばならないと感じさせられました。

各学校の発表からいくつか TIJ でも取り入れたら良いかもしれない、というものがありましたので、ご報告いたします。

1. コース評価の取り組み

学校の質を高めて選ばれる学校であり続けるために「自己点検・自己評価」をしなければならない、という観点から学生に各学期の評価をしてもらい、改善できる点は改善する

というもの。5段階評価で3をふつうとし、5はとても良い、あるいは十分満足できる、という評価で、授業内容、各教師の両方を評価してもらう。

2. 大学院進学対策クラスの設置

大学院進学希望者が増えていることから、担任の個別指導に時間がかかることもあり、出来る部分については授業という形で、まとめて指導する。同じ目的の学生が一つのクラスに集まることで、モチベーションも高まる。発表校はクラスという形で2年目から設置していたが、週1回か2回の後半の目的別授業の時間をそのように分けてもいいかもしれない。このクラスを受講する前に希望をとり、本気で大学院進学を考えているのか、研究テーマははっきりしているか、論文を書く力があるか、などの面接をして受講を認めるという形をとって参加を許可する。授業の内容は研究計画書の書き方、メールの出し方、専門書の探し方、面接での注意、のような対策のほかには大学院進学後に備えてディスカッション、プレゼンテーションなども取り入れる。

3. 大学生との交流を契機にした日本語力向上の取り組み

日本語学校の学生は同世代の日本人と接したり、話したりするチャンスが少ないため、日本人の友達ができにくい。それで、コミュニケーション力が向上しないまま卒業を迎える人が多い。実際には卒業後、日本語がわからないと日本人と話す際や授業の際に困ることになるので、何とかする必要があるので、ということで、日本人の大学生と交流する機会を学校が作るというもの。学生のふだんの勉強のモチベーションにもなるという。方法としては、SNITE（国際交流大学連絡協議会）にアプローチして、いくつかの交流しても良いと言ってくれる大学のサークルを探し、①普通の授業に年に何回か大学生に入ってもらい、少人数のグループに別れ、共通の話題を見つけておしゃべりする ②学校行事（スポーツ大会、遠足）などにいっしょに参加してもらう ③興味のある大学に普通の日に遊びに行かせてもらい、授業に参加させてもらったりして、日本語ができないとどれほど困るか実感する、などを行う。

4. 映画を用いた授業

卒業前の3ヶ月に希望者を対象に日本映画を用いた授業を取り入れる。内容としては、2日で1本の映画を見る。途中であまり止めず、映画を楽しむ。面白かったセリフ、場面、わからなかったセリフ、場面について話す。ものによっては自分だったらどうするか、など話す。

5. 音読による滑らかさの向上のための取り組み

音読は有効だが、いっせいに読ませる、個別に読ませることだけでは楽しくないし、時間もかかる。それについて、Nation & Newton(2009)の提案している Fluency と Accuracy をバランスよく伸ばすための”4/3/2 technique”を用いる。それは、ある長さの文章を4分で読み、次に3分、2分と時間を短くしながら音読すると効果があるというもので、上級

クラスで800字程度の文章を2つ用意し、(物の説明に関するもので聞き手が興味を持つようなもの、例：日経新聞の新商品の紹介など) その活動を授業の45分使って行う。聞き手を意識することではっきり発音すべき言葉などに気をつけるようになるので、プレゼンテーションや面接にも役立つし、自信をもって話せるようになるという。手順は以下の通り。

- ①クラスを半分に分け、文章の一つを渡し、各自音読の練習をする。
- ②違う文章を持った相手に4分かけて音読する。聞き手はメモを取る。読み手と聞き手が交替する。
- ③同様に3分かけて音読する。
- ④同様に2分かけて音読する。
- ⑤聞き手が3回聞いてメモした内容を確認する。聞き手がきちんと聞き取れなかったのは読み手に問題があるということで、問題点を探る。

日本留学した大学生の授業を担当して

2010年10月から2011年8月まで中国湖南省にある長沙学院の学生がTIJで授業を受けました。ほぼ一年に渡って様々な授業を行いました。その中から、日本文学史と日本文学の授業について担当した講師に報告してもらいます。

長沙学院・日本文学史を担当して

鈴木 文 (TIJ)

2010年10月から2011年3月まで週に1コマ、長沙学院の学生の「日本文学史」の授業を担当しました。私は国語の教員免許は持っているものの、日本語以外教えたこともなければ、自分自身が系統的な文学史の授業を受けたことも実はないので、試行錯誤の半年間でした。

学生全員が文学「史」に興味を持つとは思えません。だからといって、「決められているのだから興味がなくてもとにかくやる」という姿勢で一方向的に講義をすることもできません。そこで、開始前に方針を考えてみました。まず、目的は「これから新聞・小説・テレビ等、日本語で情報を得る時に必要になる歴史と文学の基礎知識を身につける＝一般的な日本人が知っていると思われる人物、事柄、作品を知る」こととしました。基礎とか一般的というのは漠然としています。曖昧なまま授業開始、最終的には試験で求めるのは一応中学卒業レベルということ落ち着きました。次に、日本文学は中国文学から多大な影響を受けているので、そのことを意識的に取り上げようと思いました。これについては、教師の一方向的な講義を避けるためにも、また、自国の文学を見直すという点からも、日本に影響を与えた中国文学について学生に回り持ちで発表させることを決めました。

授業は時代ごとに①歴史の流れ、その時代の特色、生活、風俗 ②その時代の文学の特

色、代表的な作品の概要 ③代表的な作品の一部の現代語による紹介 の順で進めました。そもそも学生たちは日本の歴史をよく知らないため、文学史ではありますが①にかなりの時間をさき、イメージを作りやすいようにできるだけ画像を使いました。使った画像は、その当時の建築、服装、文化財の写真が中心ですが、ネットの画像検索機能で簡単に教材収集ができましたし、博物館が WEB で公開している所蔵品の画像も役立ちました。②については、時代と文学のつながりを伝えたいと思ったのですが、これはなかなか難しく、作者と作品名を覚えることで終わってしまった感があります。③では、原文と現代語訳を並べたプリントを配布。詩歌、特に和歌は五音・七音のリズムをとりながら音読したり、気に入った歌を暗誦させたりもしましたが、古い時代の散文については学生に原文を読ませることはせず、有名な冒頭の文を現代語訳で読む程度にとどめました。また、狂言、文楽、歌舞伎などの演劇は、この③の部分で動画を見せました。画像や動画はパソコンを持ち込んで見せましたが、見えにくいこともあり、機材の扱いは課題のひとつです。

教科書は大学が指定したものを中国から持って来てもらいましたが、内容や言葉が難しい上、情報や文法の間違いも多く、間違いを訂正しながら、有名作品の説明やあらすじなど、部分的に使いました。教科書を何度も訂正しながら使うのには抵抗がありますが、学生によると、日本で買うより安価であること、国で勉強する同学年の人と同じ教科書を使うのは安心感があるとのことでした。

半年間勉強に追われましたが、学生たちの明るさと活発な反応に助けられて何とか終わることができました。最初に決めた目的、目標で概ねよかったのではないかとは思いますが、反省も多々あります。まず、当然のことながら、情報量をしばっても古い時代のことなど一回話を聞いたりテキストを読んだりしただけでは全く頭に残りません。これは前半3か月で痛感したので、後半の授業では覚えてほしい言葉を毎週1～2分、復習しました。また、古文を敬遠し過ぎず、もっと暗誦を取り入れればよかったとも思います。学生たちは思った以上に「暗誦」に慣れ親しんでおり、一人が有名な漢詩を紹介すると、いつの間にか全員の合唱になったこともありましたが、「名句名言」といったものに対して興味を示す学生も多かったです。それで、終わり近くになって、「近代・現代詩も有名なものは紹介しよう」と思い立ったのですが、時間が足りませんでした。当初、「文学史の勉強をできるだけ実際的なことと結びつけたい」と考えていましたが、実利を離れて、リズムや響きなどを楽しむ時間も大切かもしれません。今後、また機会があったら見直したいと思います。

長沙学院「日本文学」報告

渡部尚子 (TIJ)

2011年4月から8月までの2学期にわたって長沙学院の「日本文学」を担当した。昨年10月に来日した学生たちの約10カ月にわたるT I Jでの日本語研修の最後の部分にあたり、前学期までの「日本文学史」を授業を受けたうえで、生(なま)の文学作品に触れる授業であった。国文科出身ではなく、日本文学に格別の素養もない自分が、どのようにして全15回にわたるこの授業で取り上げる作品を選定すればよいか、正直途方にくれた。長

沙学院から届いている先方の日本語専攻過程の教科書「日本文学」を参考にと一時は考えたが、そこに取り上げられた小説がどのような基準で選択されたものなのか、今一つ確かでなかった。そこで教材となる作品の選定にあたっては、担当する一日本人の選んだ、作者、題材、メッセージ、などの点でこれは読んでみてほしい、とおすすめの商品という基準に基づき明治以降現代までの時代をカバーする、以下のものとなった。

| 小説 | | 詩 | |
|------------|-------|---------------------|-------|
| 「小僧の神様」 | 志賀直哉 | 「雨ニモマケズ」 | 宮沢賢治 |
| 「伊豆の踊り子」 | 川端康成 | 「わたしを束ねないで」 | 新川和江 |
| 「吾輩は猫である」 | 夏目漱石 | 「道程」 | 高村光太郎 |
| 「斜陽」 | 太宰治 | 「竹」 | 萩原朔太郎 |
| 「蜘蛛の糸」 | 芥川龍之介 | 「朝のリレー」 | 谷川俊太郎 |
| 「博士の愛した数式」 | 小川洋子 | 「祝婚歌」 | 吉野弘 |
| 「時が滲む朝」 | 楊逸 | 「こだまでしょうか」「私と小鳥と鈴と」 | 金子みすず |

まず学期のはじめの授業のときに、選んだ小説の日程表を配布し、担当の希望を募った。それぞれの学生が興味を持って思い思いの担当を申し出てくれた。

授業の進め方、内容として私の頭に浮かんだイメージは、ゼミ形式であった。長沙学院の学生たちは国の大学で日本語専攻の3年生である。6人という人数も、小説を読むという活動も、通常の大学生のゼミの形で行うのにぴったりだと考えた。そこで各人一つずつ小説を担当し、その作品について、①作者、作品の背景について。②この作品の登場人物、舞台、ストーリー、中心となるメッセージ。③自分の感想の三点について、クラスで発表し、ほかの人から質問を受ける、とした。

そのためには発表者も他の5人の学生もその日の作品を読んでおく必要がある。そこで私は授業の始めの日に、担当者を決める際、学生たちに、a これは日本の大学生が行うゼミの形式である。b 担当者はもちろん、担当でない人たちも必ずその日の作品は読んでくること。c 担当者は、上記の内容について、発表（プレゼンテーション）を行う。できればそのレジメも配布してほしい。毎週取り上げる作品を自分の力で読むことは容易ではないかもしれない。特に、100年近く前に書かれた作品もあり、文学的な表現もあって、今までに接した日本語の文章とは違う難しさがあるだろうが、是非がんばって読んできてほしい。最初は途方にくれるかもしれないが、だいたい20ページを越えるあたりから、不思議なくらい読み進められるようになる。この体験を実感すれば、将来どのような日本語の文章も読んでいけるという、自分なりの感覚をつかむことができる、と話した。これはかつて英文学科の学生だった頃、同様の課題を毎回課され、自分自身が体得した実感でもあったし、日本語専攻の大学生として日本へ来た彼女たちにぜひこの感覚を自分のものにしてもらいたいと願っていたからである。

実際に授業を行うにあたって注意したことは、できるだけ、作品を生き生きとした情景を頭に思い描いて読み進んでいけるように、教師が手助けを行うことであった。そのためには、場面、語彙の解説だけでなく、大正時代の商家の帳場、伊豆天城峠の景色、漱石が「猫」を執筆したといわれる家の部屋の様子などの写真も使った。また、読んでいる間に作り上げていったイメージを検証し、より理解を深められるよう、担当者のプレゼンテーションが終わったあとで、その小説の映画化されたものを鑑賞した。（「伊豆の踊り子」「博士の愛した数式」）まず原作を読んでおくことで、映画の場面やセリフがより明確にとらえられ、映画を細部まで楽しむことができたと思う。特に「伊豆の踊り子」は冒頭部分から、ほんの20分程度の部分を見ただけであったが、情景もセリフも原作に忠実に作られた映画で、作品の世界を視覚化するのによい材料となった。

毎回、担当の学生が行うプレゼンテーションは、大半がパワーポイントを用いたもので、作者、背景を調べるにあたってインターネットのお世話になったことがよくわかった。ともあれ、手軽にわかりやすく情報が手に入れられるこの文明の利器に彼女たちの学習も大いに助けられたことは事実である。

少人数で日本語のレベルも学習タイプも比較的均質で、しかも、もともと小説を読むことの好きな女子ばかりのクラスであったことで、授業は毎回前向きにその作品の世界を楽しみ、理解しようとする空気にあふれていた。この前向きな姿勢があれば、日本語力はN1によりやく届く程度であっても、かなり多様な文学作品に触れることができると感じた。何よりこの6人の学生たちの感性には大いに助けられた。時には私の予想を超えた角度で作品に込められた作者のメッセージを分析する感想も聞かれた。詩についてもあえて教師の側からの解釈を先に述べることはしなくても、学生たちは自分の感覚でその詩をつかみ、自分のものにして、朗読にむすびつけた。自分で自分の朗読を反省する材料として、録音もしてみたが、録音、という場が与えられると、いつもとは違った緊張感が思いがけない効果と呼び、ドラマチックな朗読をする学生もいた。できることならば、もう少しみっちり練習時間をとって、朗読の発表会ができれば、彼女たちはもっと張り切っただろうと思う。

担当した教師自身、これらの作品を今までとは違った意識で読み、検討し直し、無駄のない文章、印象的な描写、校正の妙など、これらの文学作品の持つ力を改めて実感した。優れた作品には時間、言葉の壁をこえた普遍的なメッセージがある。特に優れた短編小説にはその力が凝縮されている。学期終了の際に提出された各人のレポートから、彼女たちがみな思い思いにそのメッセージを受け取ったことが見て取れた。

この10か月間、彼女たちはT I Jで様々な授業をうけてきた。この文学の授業では、これまでに受けた授業で身に着けたスキルが生かされていたと感じる。「日本文学史」からは個々の作品の大きな文学史の流れの中での位置づけ、背景する視点を得、また昨年度行ったプレゼンテーションの授業で調べたことを人前で話す、その際のパワーポイントの活用など、まだまだ、これから、彼女たちが日本での勉強で得たことがどのような形で発揮されていくのか、今後が楽しみである。

今回は教師にとってもたくさんのお土産をいただいた授業であった。

日本留学した大学生の修了作文

日本で学んだこと

喩エン

いつの間にか、もう留學生活のエピローグです。日本でのこの1年間は短かったと思います。また来たときのいろいろなことがまるで昨日のこのように感じます。

この短い1年間で、自分も大分変わったとの感じがします。外見はもちろん最初に目に見えるもの。おしゃれにも熱心になってきました。私にとって、一番大きな変化は心です。中国にいた時もずっとアルバイトをやっていましたが、今のように家族と完全に離れたのは初めてです。そして、どんな困難にあっても、自分で前を向いて、解決方法を探さなければならぬということがよくわかりました。確かに、今の自分は一人で独立できるようになったと思います。

来日当初の3ヶ月のことを思い出すと、その時が一番辛かった時期でしょう。毎日放課後、コンビニからもらった「Town Work」という雑誌を、仕事を見つけるために、何度も読みまくる。そうしながら、携帯で店の応募受付電話番号を打ち続けていました。その結果、数え切れないほどの門前払いを喰いました。私は面接の壁にぶつかって越えられないのか。「そんなことは絶対ない」と自分がそう信じていました。たゆまず頑張り抜いた結果、私は成功しました。中国には「できないことはない。それは人の努力と意志次第だ」ということわざがあります。

3月の東日本大震災を経験して、心がもっと強くなりました。実は、地震の体験、特にあんな大きい地震は初めてでした。当時は本当に怖くて、一時意識を失ったほどでした。その時は夜全然眠れなくて、焦っていました。親切な先生のおかげで、そして被災地の皆さんの冷静さと政府の素早い対策のおかげで、私も地震の闇から脱出できました。幸い、私たちみんな無事に生きていることを感謝しています。今後、どんな困難にあっても、逃げないで、前向きに進みます。

アルバイトであったことも一生の思い出になります。みんな大きい家族のメンバーで、お互いに持ちつ持たれつです。社員たちから、日本人の仕事のまじめさ、そしてお客さんへの心遣いをよく感じました。そして、私はただ一人のアルバイトでも、仕事をしているときにはきちんとやるべきという意識を身に付けました。将来、自分が社員になったら、そうやり続けます。

一番感謝したい人は、TIJの先生方です。私達のお母さんみたいに生活も仕事もいろいろ面倒をみてくれました。まるでお母さんです。大変ありがとうございました。

この日本で、日本人と一緒に仕事をしたり、生活したりして、私たちはほんとうの大人に成長しました。日本でのこの一年間は一生の思い出になりました。

日本語の授業だけではなく、さまざまな文化体験をしました



クリスマス会で、すばらしいダンスを披露してくれました。



クリスマス会で、歌も歌ってくれました。なかなか上手でした。



文化交流祭りでは、中国の戯曲を演じてくれました。



花火大会の日にゆかたを着ました。



生け花も体験しました。



先生たちを送別会をしました。

収穫いっぱい的一年間

キョウ少川

日本語専攻の学生にとって、留学するというのは人生の中の重要な決定です。日本に来る前、一体留学するべきかどうか分からなくて迷っていました。一年間の短い時間で自分が勉強したいことを勉強できますか。日本の生活になれることができますか。日本人はどうですかという不安でいっぱいでした。「自分の好きな道を選びなさい」「若いうちに視野を広げなさい」と母は言いました。そして私は留学を決めました。

一人で外国で生活すると、結構いろいろな問題があって、自分で解決しなければなりません。私は、中国のたくさんの一人っ子と同じように、家で両親に大事にされ、家事をやったことがなかったし、料理も作ったことがありませんでした。でも今は、それがどんどん上手になりました。

日本に来たばかりのときは、いつもさびしいと感じ、自分の日本語に自信を持っていなかったから、日本人と話したくありませんでした。2ヶ月あと、自分の日本語が進歩していないと思いました。自分が日本に来た目的は何ですか。このままでは後悔するでしょう。それから、日本人と交流する意欲が増してきました。冬の初めに、アルバイト探しが始まりました。自分で応募したり、面接地への道を探したりして、面接を受けました。ラッキーなことに自分の好きな仕事を得ました。それから日本人と話す機会が多くなって、日本の食べ物と日本の文化と日本人を深く理解できました。仕事を通して、日本人と友達になりました。

みなさん知っているように、3月11日に大地震がありました。初めてそんなに大きな地震にあつて、春休みの際に、たくさんの学生が帰国しました。両親も心配して、帰国するように勧められました。いったん帰国したあと、日本に戻ってくるのを迷いました。「留学の途中で諦めたいですか。」「いいえ、諦めたくない。」4月に日本に戻ってきたとき、ちょうど桜のシーズンでした。満開の桜を見て、日本は無事だ、よかったと思いました。

時が流れて、そろそろ帰国の日を前にして、両親に会える喜びでいっぱいですが、日本を離れたくない、親切な先生、日本の友達と離れたくない、美しい景色いっぱいの日本、あきらめない日本と離れたくないと思います。

振り返ると自分の成長が見えます。自立する力を持っています。視野を広げました。日本で収穫したこと、それは人生の大切な宝です。いったん日本とさよならします。機会があれば、ぜったい戻ってきます。



海外便り

シンガポールからこんにちは

大谷 洋子

TIJで教育実習を終えてシンガポールに渡り、1年4か月が経ちました。この間、インターナショナルスクール、大学のボランティア、家庭教師、民間の日本語学校で日本語教育に携わりました。そこで、感じたことや見聞きしたことをお伝えしたいと思います。

シンガポールは、多民族国家（華人系（74.1%）、マレー系（13.4%）、インド系（9.2%）、その他（3.3%））で、英語と母語の2言語政策が取られているため、国民の68%が2か国語以上を読み書きできます（2010 Census of population）。小学校の卒業試験の成績で上位10%以内に入った学生は、フランス語、ドイツ語、日本語のうちいずれか1つを教育省語学センターで学ぶことができます。4年間のコース（中学校）とそれに続く2年間のコース（高校）があり、それぞれのコースの最終学年では、GCE O Level、GCE A levelという試験を受けます。GCE O LevelはJLPTのN4とN3の間ぐらいのレベルであり、1対1のオーラルテスト、作文（絵を見て状況や登場人物の気持ちを描写するものと、いくつかの課題から1つを選んで書くもの）を含み、より本格的に4技能が試される内容となっています。コースのシラバスにご興味のある方は、下記アドレスをご覧ください。

http://www.moelc.moe.edu.sg/textbook/2011/11_sow_jap.pdf

シンガポールには、日本語を学びたいという学生・社会人が大勢いて、日本語教師には嬉しい限りです。日本の会社に就職している社会人が日本語学校に学びに来たり、会社内で日本語学校の出張授業を希望者に無料で受けさせたりしている例もあります。また、グローバル採用をしている日本の大手企業が、日本での研修の前に初級～中級の日本語研修を日本語学校に委託して行っています。このような状況からすると日本の経済力に根ざす日本語需要がまだ多いような気もしますが、日本企業に就職するために日本語を選択しているという大学生の数は、シンガポールの最高学府であるシンガポール大学でも非常に少なくなってきたとのことです。とは言え、大学での選択授業としての日本語人気は高いので、日本語を勉強すること自体が楽しい、日本のマンガやアニメ、（携帯）小説が面白い、日本へ旅行したいなどの理由で日本語を勉強しようと思う人が少なくないことの表れかもしれません。

シンガポールの日本語の教授法は、直説法を謳っている学校でも、語彙表は英語併記で渡したり、理解促進のために一部英語を使ったりするなど、大なり小なり媒介語（英語）を使っています。また、学生も英語での説明を求める傾向にあります。実生活で日本語を使う機会がほとんどないので、コミュニケーション重視というより、文法・文型を「みんなの日本語」や独自テキストに沿って、教師主導で導入、練習していくのがスタンダードのようです。

当地では、2001年より日本語教師の会が設立されています。現在、会員は74名です。シンガポールの各大学で教鞭を取られている先生方が中心となって事務局を運営されており、その人脈を活かして講師を招聘し、セミナーや講演会を開催されています。シンガポール

にしながら各々の分野で活躍されている先生方のお話が聞けることは大変貴重な機会となっています。

教育実習を終了して

獨協大学 中江絵美

計 10 日間の実習は私にとって本当にあつという間でした。実習期間全体を通して、実際に授業を担当させていただく初級のクラスだけでなく、初級から中級までの、一般の学習者と進学を希望するそれぞれの学生が学ぶ授業を見学させていただきました。

私はこれまで、NPO 団体が行っている小学生から中学生までの外国人の子どもたちに日本語を教える活動に参加していました。しかし、日本語学校に通う外国人の方たちと触れ合ったことがなかったので、TIJ で学ぶ学生たちに会い、また学生たちとコミュニケーションをとりながら日本語を教えている先生方の下で実習を行えることをとても楽しみにしていました。実習が始まり、授業の見学をさせていただく中で、TIJ に通う学生たちの印象は、初級・中級のクラスともに、とても素直で学習意欲が強い学生が多いなあ、というものでした。授業の休憩の時間や終了後には色々話せる機会があったので、短い期間でしたが多くの学生と触れ合うことができました。

“日常の生活場面で使える言語を習得する”という目標の下で、学生たちに日本語を教えると言う作業は、見学をしても実際に授業を実践してみても非常に面白いと感じました。そのように感じた一番の理由が、学生が言語を習得する過程に、教師の働きかけや指導が加わることで、理解につながっている様子を見ることができたためです。もちろん、授業を行う上での経験や技術、知識などはとても不十分ですが、それぞれの授業において、そのように感じた場面を多く目の当たりにしたことが、日本語を教えることの面白さを改めて実感するきっかけとなりました。

また、市川先生に教案の指導と共に、TIJ に通う学生たちを取り巻く社会状況などについてもお話を聞かせていただきました。学生たち一人一人が、日本語を学ぶ理由は違う中で、いかにして日本語に興味や関心を抱いてもらうか、実践的に日本語を用いることができようにするのかということ、授業を作る際には創意工夫する必要があることを教えていただきました。そのために重要な教師の役割として特に心に響いた言葉が、「教師は、教科書に書かれた平面的な学習内容を、教室活動を行う中でそれを立体的にすること」ということです。言語を学ぶためには、それを用いる場面のイメージを教師と学生が共有することが、必要であることを学びました。

TIJ で学んだこれらの内容は、教師を目指す自分自身にとって、理想とする教師像の一つの軸となりました。これからも、教材研究やそれ以外のことで多くのことを経験し、よりよい授業づくりを探究し続けることができる教師になりたいと感じました。例年にはない実習日程にも関わらず、実習を受け入れてくださり、本当にありがとうございました。

TIJ での 2 週間の教育実習の日々はとても充実しており、様々なことに驚き、そして多くを学ぶことが出来ました。教育実習をさせて頂き、とても感謝しております。実際に生の日本語教育の現場を見ることはなかなか出来ないのも、とても貴重な経験をさせて頂きました。TIJ に来て一番驚いたことは独自の授業方針です。独自の教科書や授業スタイルでの教育をしており、今まで大学で行ってきた模擬授業とは全く違ったものでした。教育実習に来る前は大学で「みんなの日本語」という教材を使用していたので、TIJ の教科書を初めて見た時は、その違いに驚きました。大学では文法に重点をおいた教育方法で勉強をしていたので、決まった文型を口頭練習させるやり方の模擬授業をしていました。しかし、TIJ では文を無理やり提示して言わせるのではなく、教師が場面を提示して、学生の発話を引き出すという方法でした。私はこの教育方法がとても素晴らしいと感じ、私もこのような教育方法で語学を学んでいれば、もっと上達したのではないかなと思いました。日本語教育では様々な教科書が使用されると思いますが、私は TIJ の作った教科書が効果的であり、生きた日本語の習得ができ、学生の使用できる日本語の幅が広がると感じました。

様々なレベルの授業見学をさせて頂き、それぞれのクラスに合わせた授業のしかたがあると改めて学びました。先生方がとても熱心に指導をされていて、学生もとても楽しそうに授業を受けている様子が印象的でした。

教壇実習をさせて頂き、改めて教えることの難しさを知りました。大学での模擬授業は日本人学生を相手にしていたので、予測通りの反応でしたが、実際の留学生を相手にすると予想外のことが起こるので、臨機応変な対応をすることが大切だと感じました。教壇に立つ前は 2 回とも緊張しましたが、授業を始めてからはできるだけ明るく、楽しい授業にすることを心がけました。学生が楽しそうに授業に参加してくれたことが嬉しかったです。1 回目と 2 回目は違った性質の授業で、2 回目の方が教案に着実に行わなければならなかったのが難しかったですが、貴重な経験になりました。

TIJ では中国人学生が多いですが、同じ中国人学生でも、それぞれの日本に来た理由、日本語を勉強している理由が違うという現状があることを知りました。理由によって、勉強に対するモチベーションが違うので、クラスを一つにまとめることの難しさも知りました。学習者のバックグラウンドを知ることがとても大切だと感じました。

実習を通して、多くの先生方や学生といろいろなお話ができたことも貴重な経験になりました。改めて、将来日本語教師になりたいという気持ちが強くなりました。

2 週間という短い期間ではありましたが、熱心にご指導いただき、ありがとうございます。TIJ で実習をすることができ、本当によかったと思います。この経験を活かし、これからも頑張ります。

事務局からのお知らせ

「中級から学ぶ日本語」の本文の読み方勉強会

TIJ では、進学生コース中級クラスで研究社の「中級から学ぶ日本語」を使用していますが、その本文をどのように扱ったらよいかを、皆さんで考えたいと思います。TIJ 以外の方でも関心のある方のご参加をお待ちしています。

日時 10月24日（月）1：30～3：30

場所 T I J 東京日本語研修所

参加ご希望の方は、前日までに T I J にメールまたはお電話でお申し込みください。